

第25回

日本図書館協会建築賞

The Library Architecture Award of JLA

選考経過と審査総評

＜選考経過＞ 第25回（2008年度）日本図書館協会建築賞の応募は、公共図書館5件、大学図書館3件の計8件であった。

2008年12月26日に第一次選考委員会（書類審査）が開かれた。選考委員会では応募書類を一つ一つ検討した結果、すべてを現地審査対象と決定した。その後、2009年3月の1か月をかけて、各館を3～5名の委員が現地審査した。

4月20日に第二次選考委員会をもち、評価ポイントの確認の後、約3時間を当てて各館の視察報告と意見交換を行い理解の共通化を図った。引き続き全体を通して総合的な審査を行い、最終的に投票の結果、大手前大学さくら夙川キャンパスメディアライブラリー“CELL”と、あきる野市東部図書館エルの2館が本年度の日本図書館協会建築賞として選定された。

*

＜審査総評＞ 本年も、計画当初から従来の建築像からの転換を意図した大学図書館3館の応募があった。これは前回の審査総評にも記されているように、大学間における学習環境整備の競争化の中で、大学図書館はその中心となるものであり、在学生、受験生の大学イメージ形成を大きく左右すると認識されているからといえよう。同時に、学術情報流通の電子化に伴い研究図書館機能は非来館型サービスが主流になり、大学図書館は学部段階の学生が来館して学習する場としてや、資料を用いた教育の場としての役割、加えて大学公開の一環をなす地域住民の利用受入が重要になってきていることを示しているといえる。

本年は昨年の受賞館のような既存他用途施設の転用や既存図書館のリニューアル事例はなく、いずれも新築施設で、その際にPFIによる施設整備手法を採用した館は2館であった。また、同一の設計者による2005年と2007年開館の同じ市の本館と分館の応募があったことも特筆できる。

受賞館とした大手前大学さくら夙川キャンパスメディアライブラリー“CELL”は、小集団教育という大学の教育方針を具現化した施設であり、今後のキャンパス整備の中心と位置づけられる。1階の閲覧室周囲に8室の館名に冠するセルと呼ばれる小部屋をもつ。その分開口面の少ない閲覧室内には適度な内向性が生まれ、大学図書館らしい落ち着きと品格を備えた図書館になっている。外周部の8室と合わせ、教室、研修室、グループ活動室、そして就職情報室など多目的に利用されるセルは、近隣住民にも開放される。1階と地下1階のつながりが希薄であることやサイン計画に難点が見られるが、建物内外および屋上面ともに設計密度は濃く、大学図書館に求められる機能性と建築としての高い品質を兼ね備えている点が高く評価された。もう1館であるあきる野市東部図書館エルは、高齢化の進む閑静な住宅地の近隣公園を南に置く立地を活かした施設配置とその外観デザイン、公園の樹木を適度に遮光材としつつ、適正な量の資料と座席を備えた1階閲覧室の居心地の良さなど、成熟した地域コミュニティのサロンとしての分館が備えるべき諸要件を高度に充たしていることが、他の模範例にふさわしいと評価された。

残る大学図書館2館は共に力作で、県産材を用いた柱と梁の架構、階段状にせり上がる閲覧空間が強い印象を与えるA大学図書館は、使い勝手の点で図書館としては特殊解に過ぎるとの評価であり、座席と書架のゾーニングなどに運営側の詳細な検討の成果が読みとれるB大学図書館は、いくつかの難点が看過できないとされた。また、大きな延床面積を有するC市立図書館は、直行する通路空間を設けて各機能の融合を図った点、意欲的な図書館運営とサービス実績は評価されるものの、上下階のつながりや家具配列など図書館部分の作り込みが不十分とされ顕彰館とするには至らなかった。しかし、応募作品はいずれもレベルが高く、企画計画段階での運営側の熱意と設計者の努力・

技術力の高さが伺えた。

(文責・植松貞夫^{うえまつまさお}：筑波大学附属図書館長)

*

<選考専門委員会>

主査 植松貞夫（筑波大学附属図書館長、日本図書館協会施設委員会委員長）

委員 出江 寛（出江建築事務所所長：日本建築家協会会長）

齊藤誠一（千葉経済大学短期大学部准教授）

川島 宏（栗原研究室）

中井孝幸（愛知工業大学工学部建築学科准教授）

小畑信夫（図書館・メディア研究所代表）

菅澤美恵（大町市八坂小学校職員）

松岡 要（日本図書館協会常務理事・事務局長）

大手前大学さくら夙川キャンパス メディアライブラリー “CELL”

所在地：662-8552 兵庫県西宮市御茶家所町6-42

延床面積：4,478,60㎡

蔵書収容力：26万9000冊

開館：2007年9月20日

設計：日建設計

（応募者：日建設計）

* * *

大手前大学は西宮市と伊丹市にキャンパスを持

ち、西宮市のさくら夙川キャンパスは2～4年生の学びの場である。メディアライブラリー CELL は、学園の60周年記念事業の一環として新築された複合施設である。図書館専用部分が約半分強の面積を占め、他は教室やe-ラーニングコンテンツスタジオ、多目的ホール等で構成されている。館名に冠する“CELL”はCommunication & E-Learning Libraryの頭文字であるが、同時に、この館の最大の特徴といえる1階の開架閲覧室を囲む16の小部屋（cells）にも用いられている。

最大でも20人程度収容の小部屋は、閲覧室に接して8室、外周デッキに8室が設置されており、室内の家具も多様で、グループワークや講義・ゼ



▲大手前大学さくら夙川キャンパスメディアライブラリー “CELL”・北東側外観

ミ、周辺住民の会合など多目的に使用される。閲覧室に接する8室も外周部側にもドアを持つため、閉館後や休館日にも利用することができる。

小ユニットを重視した理由は、教育システムと両輪の関係にある。施設づくりのコンセプトワークでは、広く関係者が集まり議論を交わしたという。課題解決型・少人数教育を重視し、学部学科の枠を超えて学びたいものを選択できる「ユニット自由選択制」なるカリキュラム改革を開館と同じ2007年から実施し「目的を限定せず自由に」がこの施設計画にも踏襲されている。

キャンパスのほぼ中央部に位置する新図書館は、キャンパスの中庭としての役割も意図され、低くフラットな階構成となっている。地下1階と1階に主な用途をまとめ、会議室など僅かな床面積の2階レベルの屋上には、緑とアートを配したガーデンが広がっている。この屋上庭園を深い庇とし、cells がリズムカルに並んでいるため、周囲の住宅と穏やかに調和している。

図書館部分の構成は、1階にメインの開架閲覧室をまとめ、地下1階は保存機能を重視した開架閲覧室である。1階閲覧室周囲にはガラスを多用しているが、庇と小部屋が直射光を遮り、心地よい陰影とビューを室内にもたらしている。また、

地下1階にも敷地の傾斜を利用して一部外光を取り入れているため閉塞感は少ない。なお、開架を主体としているが、広場を介して向かい合う旧図書館の一部を閉架書庫として補完する予定である。地下1階には充実した設備とスタッフを有するeラーニング用教材収録用のスタジオがあり、ここで制作されたコンテンツは同じ地下階のPC教室・制作室や図書館内、並びに自宅からでも学べることが意図されている。

厳しい大学経営環境下にあって、教育や図書館サービスのあり方を鮮明に描くことは容易でないが、この大学ではコンセプトの明確な図書館を創りあげた。新しい大学図書館像の一つを示唆する図書館であること、そして図書館づくりのプロセスが高く評価された。書架サインが書き換えに対応しづらい点や、1階と地下1階とのつながりが希薄であるなど疑問点はあったものの、型枠を工夫したコンクリート打ち放しなどの素材の表現、細部の処理などを含め、大学の中心施設として抑制と高揚感とが調和した建築デザインの完成度が高いことなどから、優れた図書館であると判断した。

あきる野市東部図書館 エル

所在地：197-0823 東京都あきる野市野辺39-27

延床面積：1375.22㎡

蔵書収容力：9万5000冊

開館：2005年8月1日

設計：岡田新一設計事務所

(応募者：岡田新一設計事務所)

* * *

この図書館は、東西18kmと横に長く中央をJR五日市線が貫くあきる野市の、東秋留駅に近い住宅地に設置された図書館分館である。本市では2004年策定の「図書館整備計画」にそって施設整備が進められているが、その具体化第1号として建設された。市内にはこの他に、中央図書館(2007年開館)、西部地域をカバーする長い伝統を誇る五日市図書館、中央南部地区の中央図書館増戸分室(分館として整備予定)がある。

まず、上記の整備計画を策定し、個々の館の基本計画の策定、設計業者の選定、1995年秋川市と五日市町との合併による旧合併特例法の特例債を活用した図書館づくりは、経験豊かな図書館関係者の努力と先見性によるところが大きい。良い図書館を作るには、首長の英断も含めた行政各部署の判断が大きく作用する。2年の間に、中央図書館と本図書館を着実に開設させたことは高く評価すべきであろう。また、分館としては蔵書・面積ともに大きな規模を確保したことも称賛に値する。

図書館周辺は比較的敷地面積の大きな永住型住宅地として計画的に開発された地域で、他地域よりも高齢者率が高い成熟した地域コミュニティが形成されている。基本的には徒歩来館を想定しているが、郊外住宅地特有の自家用車保有の高さに配慮して17台の駐車場を北側に確保している。閑静な住宅地の軒並みに調和させるべく、東西に長い建物の長辺にゆるやかな曲面の屋根をもつ外観デザインは、抑制がきき控えめな印象を与える。

図書館敷地の南側はすべて公園で、仕切りがな



▲あきる野市東部図書館 エル・北側外観

いたため館内から四季それぞれの眺望が得られるとともに、公園北側の築山に並ぶ樹木が図書館に適度な日陰をもたらしている。そのため水平庇やルーバーなど建築装置と合わせ、閲覧室の南面を開放感のある大きな窓面とすることができている。

図書館1階には、一般開架、ブラウジングコーナー、レファレンス・地域資料コーナー、ヤングアダルトコーナーなどを配置し、2階に児童室と会議室や学習室などの集会機能を配置している。書類審査時には、児童室が2階にあり子どもたちの利用意欲をそぐのではとの意見があったが、内部階段は入口すぐに設けられており、かつ、公園内の散策路から直接2階に導く外部階段が用意されていて公園で遊ぶ子どもたちを迎え入れることが現地審査で確認された。散策路から続く2階のウッドデッキは開放感があり、図書館と公園の親和性を高めると同時に、上部の深い軒は2階諸室の日射コントロールの役割も果たしている。

館内の家具レイアウト、資料種別の配置ゾーニング、カウンターを含めた家具それぞれのデザイン、仕上げ材とその色調などは、設計者の経験の蓄積を反映したものであり、図書館側の意図の明

確さが伝わってくる。作業動線を最小限にする職員の執務環境も合理的であり不足はない。

ただし、館内の階段が子どもたちが元気よく上る際には歩行音の発生しやすい素材であること、中央図書館もそうであるが、一般開架室と児童開架室を明確に分離して室内での相互の行き来を閉ざしていること、集会室と一般開架室との連携利用には不向きな階構成であることなどについて意見があった。

高いサービス実績が手厚い職員体制の措置という好循環を生み出しており、成熟した地域コミュニティにおける日常的な利用施設としての図書館の機能性と建築の完成度を評価するとともに、他の自治体における地区図書館建設のモデルとして本賞にふさわしい図書館と判定された。

[NDC 9:012 BSH:図書館建築]

図書館空間の創造 建築賞作品集 1985
日本図書館協会 -2006

図書館の発展を願い、館種を超えて器としての建築の質、中身のありようを問うてきた第22回までの作品集。

社団法人日本図書館協会施設委員会図書館建築図集
編集委員会編 A4判 上製 224p 31,500円(税込)